


充実した研究支援体制

ライティング指導室（創思館 307）には、研究指導助手と英語論文指導スタッフが常駐しており、以下の業務を行っています。

- ・日本語論文の書き方および添削指導（研究指導助手・日本語論文指導スタッフ）
- ・英語論文の書き方および添削指導（英語論文指導スタッフ）
- ・先端総合学術研究科主催のシンポジウム・研究会の企画・運営に関わる業務。
- ・『Core Ethics』(研究科紀要)の編集、研究科彙報の編集、研究科 Web サイトの管理、院生プロジェクトの運営の支援など。

また本研究科の博士論文の閲覧受付、図書・備品の貸し出し、『Core Ethics』・彙報の配布等も同室にて実施しています。



多彩な研究教育プログラム

先端総合学術研究科は、開設以来「プロジェクト型大学院」として他の研究所・センター群と連携しつつプロジェクトを遂行してきました。現在は、①のプロジェクトの拠点を中心に、②の機関と連携して教育研究を進めています。

- ①プロジェクトの拠点
- ・生存学研究センター
 - ・ゲーム研究センター
- ②連関する研究所群
- ・人間科学研究所
 - ・国際言語文化研究所
 - ・アート・リサーチセンター
 - ・国際平和ミュージアム
 - ・平和教育研究センター

など

これまでの博士論文例

2003年4月の本研究科開設以来、2016年9月までに103名（甲種100名、乙種3名）の博士号取得者を輩出しました。

これまで提出された博士論文の題目は、研究科ホームページに掲載しております。

博士号取得者 <http://www.r-gscefs.jp/?p=88>

2016年3月と2016年9月の博士号取得論文(8本)

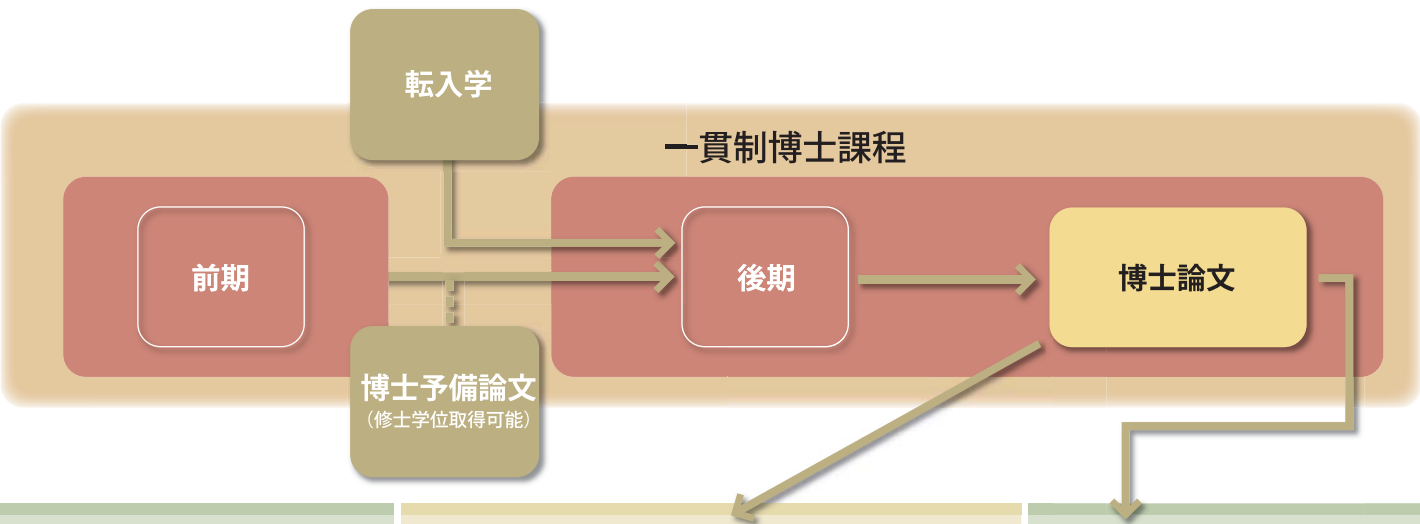
「女子教育における化粧の役割—(少女)に求められた化粧の歴史—」
「保安処分構想から医療観察法体制へ—日本精神保健福祉士協会の関わりを中心に—」

「老後が見えない離別女性たち—その人生の作られ方—」
「神戸中華同文学校の多文化・多言語教育—学校コミュニティの維持・創造をめぐる—」

「神谷美恵子の実践の研究—1960年代の長島愛生園を中心に—」
「対人援助におけるコミュニティ通訳者の役割考察—通訳の公正介入基準の検討—」

「台湾における「善終」概念の変容と実践—終末期医療の法制化を中心に—」

「日本手話によるろう教育の展開—言語権からみたバイリンガルろう教育の内と外—」



院生のための奨学金・研究活動助成制度

- ・先端総合学術研究科院生プロジェクト
- ・立命館大学大学院1年次対象成績優秀者奨学金（Ⅰ・Ⅱ）
- ・立命館大学大学院2年次対象成績優秀者奨学金（Ⅰ・Ⅱ）
- ・立命館大学大学院博士課程後期課程研究奨励奨学金（S・A・B）
- ・立命館大学大学院博士課程前期課程学生会補助金
- ・立命館大学大学院博士課程後期課程学生会発表補助金
- ・立命館大学大学院博士課程後期課程国際的研究活動促進研究費
- ・立命館大学大学院博士課程後期課程国内研究活動促進研究費
- ・立命館大学大学院学生会活動支援制度

※先端総合学術研究科の院生が利用できる支援制度の一部です。制度は変更される場合があります。詳細は、入学時または入学時に説明します。

※立命館大学大学院に対する奨学金・支援制度の概要 <http://www.ritsumeai.ac.jp/ru/gr/g-career/fellow/>

※「大学院生のための奨学金・助成ガイド」を配布しています。

博士論文などをもとにした書籍の刊行

書籍名（2016年以降に刊行されたものの一部）

尾鼻崇（2008年度修了）『映画音楽からゲームオーディオへ——映像音響研究の地平』見洋書房、2016

田中圭子（2008年度修了）『日本髪大全——古代から現代までの髪型の歴史と結い方がわかる』誠文堂新光社、2016

磯邊厚子（2007年度修了）『スリランカの農園地域における母子保健——潜在能力アプローチの視点』見洋書房、2016

川端美季（2011年度修了）『近代日本の公衆浴場運動』法政大学出版局、2016

クァク・ジョンナン（2016年度修了）『日本手話とろう教育——日本語能力主義をこえて』生活書院、2017

由井秀樹編（2013年度修了）『テーマでひろく学びの扉 少子化社会と妊娠・出産・子育て』北樹出版、2017



研究者としてのキャリアパス支援

博士号取得後のキャリアパスとして、各種ポストドクトラルフェローの制度があります。日本学術振興会特別研究員や立命館大学衣笠総合研究機構の専門研究員プログラムなどに多くの院生・修了生が採用されています。

日本学術振興会特別研究員採用者数	
2011年度	DC4名+PD3名
2012年度	DC9名+PD4名
2013年度	DC2名+PD3名
2014年度	DC4名+PD2名
2015年度	DC2名+PD4名
2016年度	DC1名+PD1名
2017年度	DC1名+PD1名+RPD1名

※PD・RPDは送り出し

衣笠総合研究機構専門研究員新規採択者数	
2013年度	3名
2014年度	4名
2015年度	0名
2016年度	3名
2017年度	1名

主な就職先
ロンドン大学東洋アフリカ研究学院、金沢大学、滋賀県立大学、早稲田大学、南山大学、大阪府立大学、静岡大学、聖隷クリストファー大学、中部大学、日本福祉大学、福岡教育大学、和光大学、韓国・光州大学、台湾・高雄文藻外国語学院、島根県立美術館など

先端総合学術研究科の多様な入試方式を紹介します

入学定員は全体で 30 名です。各入試方式はその募集人数を越える合格者数になることがあります。なお、受験資格や実施時期を詳細に定めた入試要項については、必ず最新のものを大学院課に請求して下さい。大学院入試 http://www.ritsumeij.jp/gr/index_j.html から申し込みできます。

一般入学試験（募集人数 10 名）

■選考方法
書類選考、筆記試験および面接試験を総合評価し合格者を決定します。

- (1) 筆記試験
- ・論文 公共、生命、共生、表象の4つのテーマ領域から1つを選択。
 - ・外国語 英語（ただし、英語以外での外国語で受験を希望する場合には出願開始日までに研究科（出願書類送付先）に相談してください。）
 - 辞書持込可（辞書機能付電子手帳等の電子機器類は不可。）

(2) 書類選考・面接試験

■出願書類

- 1) 入学試験志願票（本学所定用紙）
- 2) 最終学校の成績証明書および卒業（見込）証明書
- 3) 研究計画書（2,000字程度）（本学所定用紙）
- 4) 年次計画書（本学所定用紙）
- 5) 卒業（演習）論文の概要（様式自由）
- 6) 旅券の氏名・生年月日が記載された真の写し（出願時に有効な旅券を所持している外国籍の方のみ）
- 7) 中国の大学または大学院を卒業（修了）した者は、教育部学歴證書電子注冊備案表を印刷したもの、中国の大学または大学院に在学中の者は、教育部学籍在線驗證報告を印刷したもの。

一般入学試験（自己推薦）（募集人数 5 名）

■選考方法
書類選考および面接試験を総合評価し合格者を決定します。

■出願書類

- 1) 入学試験志願票（本学所定用紙）
- 2) 最終学校の成績証明書および卒業（見込）証明書
- 3) 自己推薦書（本学所定用紙）および関連資料
- 4) 研究計画書（2,000字程度）（本学所定用紙）
- 5) 年次計画書（本学所定用紙）
- 6) 自由テーマ論文（2,000字程度 様式自由）
- 7) 旅券の氏名・生年月日が記載された真の写し（出願時に有効な旅券を所持している外国籍の方のみ）
- 8) 中国の大学または大学院を卒業（修了）した者は、教育部学歴證書電子注冊備案表を印刷したもの、中国の大学または大学院に在学中の者は、教育部学籍在線驗證報告を印刷したもの。

社会人入学試験（募集人数 5 名）

■選考方法
書類選考および面接試験を総合評価し合格者を決定します。

■出願書類

- 1) 入学試験志願票（本学所定用紙）
- 2) 最終学校の成績証明書および卒業（見込）証明書
- 3) 自己推薦書（本学所定用紙）および関連資料
- 4) 研究計画書（2,000字程度）（本学所定用紙）
- 5) 年次計画書（本学所定用紙）
- 6) 自由テーマ論文（2,000字程度 様式自由）
- 7) 履歴書（市販用紙）
- 8) 旅券の氏名・生年月日が記載された真の写し（出願時に有効な旅券を所持している外国籍の方のみ）
- 9) 中国の大学または大学院を卒業（修了）した者は、教育部学歴證書電子注冊備案表を印刷したもの、中国の大学または大学院に在学中の者は、教育部学籍在線驗證報告を印刷したもの。

外国人留学生入学試験（募集人数 若干名）

■選考方法
書類選考および面接試験を総合評価し合格者を決定します。

〈問い合わせ先〉 立命館大学独立研究科事務室 tel 075-465-8348
立命館大学大学院課 tel 075-465-8195

■出願書類

- 1) 入学試験志願票（本学所定用紙）
- 2) 最終学校の成績証明書および卒業（見込）証明書
- 3) 研究計画書（2,000字程度）（本学所定用紙）
- 4) 年次計画書（本学所定用紙）
- 5) 卒業（演習）論文の概要（様式自由）
- 6) 旅券の氏名・生年月日が記載された真の写し（出願時に有効な旅券を所持している者のみ）
- 7) 中国の大学または大学院を卒業（修了）した者は、教育部学歴證書電子注冊備案表を印刷したもの、中国の大学または大学院に在学中の者は、教育部学籍在線驗證報告を印刷したもの。

学内進学入学試験（募集人数 10 名）

■選考方法
書類選考および面接試験を総合評価し合格者を決定します。

■出願書類

- 1) 入学試験志願票（本学所定用紙）
- 2) 成績証明書
- 3) 卒業見込証明書
- 4) 研究計画書（2,000字程度）（本学所定用紙）
- 5) 年次計画書（本学所定用紙）
- 6) 卒業（演習）論文の概要（様式自由）

APU 特別受入入学試験（募集人数 若干名）

■選考方法
書類選考および面接試験を総合評価し合格者を決定します。

■出願書類

- 1) 入学試験志願票（本学所定用紙）
- 2) 成績証明書
- 3) 卒業見込証明書
- 4) 研究計画書（2,000字程度）（本学所定用紙）
- 5) 年次計画書（本学所定用紙）
- 6) 卒業（演習）論文の概要（様式自由）

飛び級入学試験（募集人数 若干名）

■選考方法
書類選考、筆記試験および面接試験を総合評価し合格者を決定します。

- (1) 筆記試験
- ・論文 公共、生命、共生、表象の4つのテーマ領域から1つを選択。
 - ・外国語 英語（ただし、英語以外での外国語で受験を希望する場合には出願開始日までに研究科（出願書類送付先）に相談してください。）
 - 辞書持込可（辞書機能付電子手帳等の電子機器類は不可。）

(2) 書類選考・面接試験

■出願書類

- 1) 入学試験志願票（本学所定用紙）
- 2) 成績証明書
- 3) 研究計画書（2,000字程度）（本学所定用紙）
- 4) 年次計画書（本学所定用紙）

転入学試験（募集人数 若干名）

■選考方法
書類選考および面接試験を総合評価し合格者を決定します。

■出願書類

- 1) 入学試験志願票（本学所定用紙）
- 2) 最終学校の成績証明書および修了（卒業）証明書または修了（卒業）見込証明書
- 3) 研究計画書（2,000字程度）（本学所定用紙）
- 4) 修士論文（またはそれに相当する研究実績）およびその概要（2,000字程度 様式自由）
- 5) 旅券の氏名・生年月日が記載された真の写し（出願時に有効な旅券を所持している外国籍の方のみ）
- 6) 中国の大学または大学院を卒業（修了）した者は、教育部学歴證書電子注冊備案表を印刷したもの、中国の大学または大学院に在学中の者は、教育部学籍在線驗證報告を印刷したもの。

※出願資格、出願書類等については必ず最新の入学試験要領をご確認下さい。
いずれの試験も、試験場は衣笠キャンパスです。



人類の課題に新たな「知」をもつて挑む



「核心としての倫理」(Core Ethics)を軸に、公共、生命、共生、表象の四つのテーマのもと、新しい研究領域を創出します。

立命館大学大学院 先端総合学術研究科

<http://www.r-gscefs.jp/>

〒603-8577 京都市北区等持院北町 56-1 ホームページ <http://www.ritsumeij.jp>

人類学から共生の可能性と限界を考える——渡辺公三

文化人類学を中心に共生の可能性と限界を考究する。共生は人（個体、集団）のあいだの関係、人と他の生物種、人と環境の関係などさまざまな位相で考えられる。一つの空間を複数の個体が同時に占めることはできないという真理と、同じ場をめぐって人や生物や物が、共存から排除、他の存在の抹消までを経験する多彩なスペクトルの変化の歴史とのあいだに、法学、政治学、生物学、環境学など多様な学知の成果が錯綜するのが共生というテーマ領域である。マルセル・モースの再評価、共生の文明論などが主題となる。



渡辺公三
文化人類学



小川さやか
文化人類学・アフリカ地域研究



西成彦
比較文学



P・デュムシエル
政治哲学

竹中悠美
芸術学

千葉雅也
哲学・表象文化論

吉田寛
感性学

文化と芸術の表象論的分析
文化と芸術の諸表象を表象論的観点から読解・分析します。技術、歴史、思想、実践への理解を主軸とし、創造と受容の場、諸々の文脈、メディアといった問題系へとアプローチします。

社会におけるアートの作用機序——竹中悠美

芸術学を基礎に置き、社会の中でアートに託された機能とそれを実践するための制度的・技術的システムを検討する。アートがパブリックな文化財として「消費」される現代の資本主義社会において、われわれとアートを取りもつ主たるシステムは美術館やアートセンターという場所と情報メディアである。そこで、展覧会、アートプロジェクト、文化政策が企図する文化活動の方法と課題、およびメディアにおけるその扱いを検証することによって、アートの意義を問います。

現代哲学と批評のあいだで思考する——千葉雅也

表象文化の多様なケースを併せて考察するために、現代哲学を媒介として芸術・文化・社会・欲望の諸理論を交流させ、そして、領域「横断的」な論述の方法、および「批評」的なスタイルの修辞学を検討する。人間＝私たちを特権化しない「ものごと」の存在論・形而上学と運動して展開される表象論を目指し、これを、現代のテクノロジー状況——それは「人間性」をめぐる常識・良識を変容させざるをえないだろう——に応じた「人文学への批評」の一環として提示していく。

感性学的デザイン論——吉田寛

感性学（エスティククス）の観点からデザインやもの作りのための理論を構想・構築する。感性学は、本来的には「受け手」の側の様態を分析するための理論だが、多くの製品やサービスがユーザビリティやインタラクティブリティを重視するようになった今日、感性への着目はデザインにおいて欠くことのできない重要な視点となりつつある。インスタリアルデザインからウェブデザイン、ゲームデザインまで様々な分野に光をあて、デザイン実践と密接に関連付けられた体系的理論としての感性学を打ち立てる。

2 教員紹介

4つのテーマ領域と12人の専任スタッフがディシプリンを超えて新しい研究領域を創出します

個人個人の日常的な生き方から、国家や共同体レベルの政策決定まで、さまざまな次元を視野に入れながら、わたしたちは、コア・エシックス（核心としての倫理）にふれる4つのテーマを選びました。そして、テーマごとに「科目としてのプロジェクト」が設置され、さらに各教員が中心になって運営する「個別プロジェクト」が設けられるのです。



岸政彦
社会学・生活史

立岩真也
社会学・障害学

美馬達哉
医療社会学

公共 21世紀における公共性

身体をめぐる言説・運動・政策の変容過程を検討しつつ、断片的な生のあり方を拾いあげながら、デモクラシーと生存のための社会システムの公共性を探ります。

生活史——岸政彦

寛容さがますます失われつつある今、「他者理解」は何よりも私たちにとって必要なことだが、一方で他者を安易に理解することは暴力ともなりうる。私は、さまざまなマイノリティの個人的な生活史（ライフヒストリー）に耳を傾けることを通じて、ささやかながら、他者を理解することの可能性と不可能性について考えている。私たちはみな、どうしようもない現実のなかで、少しでもよりよい人生を生きようと懸命に努力している。そうした人生の物語が語られる現場に立ち会い、記憶と経験と歴史的現実が生まれる瞬間を目撃するために、今日もICレコーダーの小さな舟に乗って、生活史の海に漕ぎ出す。そこにはすべての苦しみ、悲しみ、喜び、希望と絶望がある。

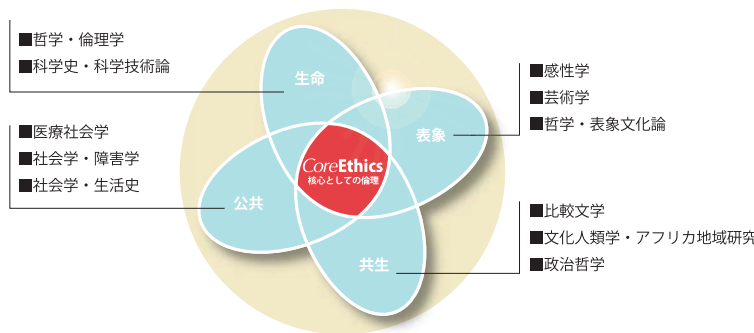
身体の現代・他——立岩真也

私は私の仕事を続けていければいくことになりますが、以下はその一部でもあり、ただ自身でとてもできず、多くの人がいるとよいと思うこと。通っていない研究費応募書類の冒頭。「障害や病が訪れて人は身体の差異・変容を生きる。その人達を巡ってこの国でこの50年余りがあったことの大部分は、記録も考察もされていない。今後しばらくが最後の機会となる。気鋭の研究者の力と大学院生・修了者の参与を得て、研究を組織化し、以下を明らかにする。」続きはHP検索→「生存学」→「身体の現代——言説・運動・政策」。

医療・身体性・グローバリゼーション・思想——美馬達哉

人間の身体は、私的な領域に属しているだけでなく、現代社会においては、バイオテクノロジーによって人格と切り離された独自存在——臓器やiPS細胞など——として公的領域のなかに組み込まれつつある。こうした意味で、身体と公共という論点は現代社会において重要である。今後の研究計画としては以下を考えている。

1. フーコーの権力論を批判的に継承しつつ、リスクに着目して、現代のグローバリゼーション状況のもとで身体性がどう変容しつつあるかを分析していく。
2. 医師という経歴を生かして、理系と文系の両方の分野を横断的に取り扱って、公共性を再考していく。
3. 脳可塑性の臨床応用とその社会的含意について、オシロロジーの観点から検討していく。



小泉義之
哲学・倫理学



松原洋子
科学史・科学技術論

生命 争点としての生命

生命科学・医療・福祉をめぐる科学的知識・技術の歴史的検討、倫理的諸問題の整理を通じて、生命・生殖・病・死を総合的に探求し、新しい生命の理解と倫理の構築可能性をひらきます。

生命論の理論的争点——小泉義之

哲学・倫理学を基礎に、小泉が中心となって、近現代において生命と生物が理論的にどのように認識され、文化的にどのように表象されてきたのかを整理して、新しい生命論を展望する。また、現代生物学がいかなる理論的課題に直面し、現代文化がいかに生と死を表象しているかを整理し、生命と生殖と病と死について総合的に探究する。そして、現代的な生物観ひいては人間観を構築することを目標とする。

生命と技術の倫理——松原洋子

科学史・科学技術論を基礎に、松原が中心となって、生命科学・医療・福祉に関する科学的知識および科学技術をめぐる諸問題について広範な資料収集をおこない、適切な研究方法を探索する。個体レベルでの生命の保持や能力の増進、次世代に関わる生殖や出生の管理、個体間での生体組織・機能や情報の交換、個と全体の関係が問われる人口・生態系・進化など、様々な位相に注目しながら、科学と技術の抱える問題を、整理・検討する。そして、こうした問題に接近するための生命論と、あるべき新しい倫理の構築をこころみる。

共生

共生の可能性と限界

多大な犠牲をともなう不完全な共生実験であった人間の歴史を批判的に遡りつつ、未来に向けて、そうした犠牲を伴わない生命と生活の可能性を構築する方途を探ります。

狡知、アナザーワールド、そしてLiving for Todayの人類学的探究——小川さやか
文化人類学を基礎に小川が中心となって、世界各地の同時代を生きる人々の日常的でミクロな営みから、他者と共によりよく生きるためのしくみや知恵、新しい人間観・世界観を模索する。とりわけ、Living for Todayの営みや、窮地に切り抜ける実践・行為（はったり、ごまかし、愛想笑い、逆切れなど）と、そこで働く狡知を民族誌的な事例から検討する。新自由主義的な経済システムや未来優位の時間の観念、生産主義的で自律的な主体観に縛られたわたしたちの生のあり方を相対化し、一つではない多様な生のあり方を構想する。

市民社会は共生のモデルとなりうるか？——P・デュムシエル

政治哲学を基礎にデュムシエルが中心となって、市民社会の起源と構造を論じたさまざまな社会、政治哲学の再検討をおこなう。西洋のそれぞれの国民的伝統のなかで市民社会が形成され、また、この社会の原理を根拠づけるさまざまな哲学の流れが生み出されてきた。市民社会においては、欲望を実現する主体としての市民を前提として、市民が契約し、経済システムを構成し、社会を民主的に運営するとされるが、欲望はどのように構成されるのか、欲望と経済システムの関係はいかなるものか、そうした基本的な視点から、そこに含まれた「普遍的」とされる原理の可能性と限界を問います。

カタストロフィと文学——西成彦

人類の歴史はかずかずの「災厄」に彩られてきた。自然災害であれ、戦争や人災であれ、災害はけっして一様にひとに襲いかかってくるわけではない。しかも、加害者側に立って責任を引き受けなければならぬことが往々にしてある。そうしたなかで、「カタストロフィ」の危険にさらされてきたひとびと、および、そこに加害者・傍観者として関わってしまったひとびとの経験と記憶は、その一部が「記録」に残されるが、それでも足りない部分は「文学的な想像力」にゆだねるしかない。文学の可能性と限界を考える。

先端総合学術研究科の理念

日本の大学制度は今、近代化の初期に大学が創設されて以来、もっとも大きな変革の時代に直面している。学部から大学院までの教育研究システム全体が、国際的な水準を視野に入れた根底的な見直しをせまられている。高度な専門職技能の養成と、新たな時代の問題に取り組む研究者の養成がもとめられているのである。この新たな時代の研究者の養成に向けて立命館大学が提起するのが先端総合学術研究科の構想である。

基本的に学部の上に置かれた現在の大学院は、明治以来の近代的学問体系にのっとりたディシプリン、すなわち専門分野の区分に基づいて構成されている。先端総合学術研究科は、20世紀から今世紀に引き継がれた新たな質の、先端的なテーマに取り組む研究者の養成のために、特定学部を基礎とするのではない独立研究科とした。独立研究科としてディシプリンの総合化をはかり、また、研究所・センター群との連携によるプロジェクト研究における教育によって、大学院教育と先端的で総合的な研究との緊密な結合を実現することを基本的な狙いとしている。（2003年先端総合学術研究科開設文書より）

一貫制のプロジェクト型大学院 ——ディシプリンからテーマへの転換

1 特色

多様なプロジェクトが織りなす新しい大学院教育

立命館大学の研究所・センター群は、学生が教員とともに課題とテーマを設定し学術研究を進展させるプロジェクト研究によって多くの成果を上げてきました。先端総合学術研究科は大学院教育とプロジェクト研究を結びつけることで、ディシプリンを横断し現代社会の要請に応じられる研究者の養成を行います。

カリキュラムは、①アカデミック・リーディングを学ぶ「基礎共通科目」、②4つのテーマ領域の専門知識を学ぶ「基礎専門科目」、③研究のアウトプット方法や倫理を学ぶ「サポート科目」、④テーマ領域ごとの研究の実践的な発表・討議の場となる「演習科目」に分かれています。プロジェクト型の教育・研究システムでは、各教員の「個別プロジェクト」が全科目の運営に反映され、専門分野のディシプリンにそって個別具体的に学ぶのではなく、テーマを横断した知を得られることが特徴です。

それ以外に、合同研究会やフィールド調査など、教員や院生の自主的・個別的なプロジェクト形成を通じて、新たな研究の潮流を生み出すことを目標とします。また研究会は専任教員を中心に学内外の第一線の研究者たち、さらにそのときどきのゲスト参加者を交えて開催され、研究ネットワークを形成します。

院生は、1、2年次には研究の基礎的な力を身につける勉強をしながら、こうした研究会やプロジェクトに参加します。1、2年次に履修する「プロジェクト予備演習Ⅰ・Ⅱ」は、各テーマ領域やプロジェクトに密接に関連した専門知識を有する教員のもとで、基礎的な研究手法を身につける科目です。2年次後期以降にはプロジェクト担当者である専任教員が受け持つ「プロジェクト予備演習Ⅲ」も加わり、博士予備論文に取り組みます。

博士予備論文の審査に合格すると、その院生は正式な共同研究者として、プロジェクト研究そのものの運営にあたって中核的な役割を果たすことになります。すなわち、計画的に研究を推進する日々の活動の一翼を担いつつ、研究会や学外の諸学会等における成果発表を着実に積み重ねていくことになるのです。

